本日は後の三人の先生方のお話の前座として、日本の都城の流れ、なかでも飛鳥、藤原京、平城京の三つの都を取り上げ、基本的な流れをお話しさせていただきます。

飛鳥諸宮の展開

飛鳥時代については、いろいろなとらえ方がありますが、普通は、推古天皇の時代から後をさしています。正史に残る最初の女帝として、推古天皇が豊浦宮に即位した五九二年十二月から、約百年後の六九四年の藤原京遷都までは、飛鳥周辺に宮殿が集中的に営まれました。そのあいだが、いわゆる飛鳥時代です。

ただし、現在の明日香村はかなり広い面積をもっていますが、当時、飛鳥と呼ばれた範囲はかぎられており、平地部分では南北一・六キロメートル、東西〇・八キロメートルほどにすぎません。明日香村の字名でいうと、大字飛鳥と大字岡の二つが中心です。その北側は小墾田、南側は橘と呼ばれていました。橘は、聖徳太子が生まれたという伝承もある地域で、現在も橘寺というお寺があります。これは、橘という地域に営まれたことから、橘寺と呼ばれているわけです。一方、推古が即位した豊浦宮は、飛鳥からみると飛鳥川をはさんだ西側の対岸にあたり、小墾田の西が豊浦になります。

もっとも、豊浦宮は、推古天皇のために新しく造営された宮殿ではありませんでした。蘇我氏の邸宅を転用したものと推定してほぼ間違いなく、不備な部分も多かったようです。というのは、推古が即位するわずか一か月前の十一月に、崇峻天皇（大王）が蘇我氏によって暗殺され、急遽、推古が即位することになったからです。当時の宮殿でも一か月で新造することは無理で、推古はもともとあったなんらかの施設を宮殿として使ったと考えられます。このあたりが、『日本書紀』に書かれていない行間を読むおもしろさでもあります。蘇我氏が豊浦一帯にいろいろな施設や邸宅を構えていたことは、さまざまな史料から明らかになっていますので、蘇我氏の一員である推古も、蘇我氏の邸宅を宮殿として使ったと考えてよいと思います。

その後、六〇〇年に隋との国交が開始されます。これについて『日本書紀』には記載がありませんが、中国の歴史書である『隋書』に、倭から使いがきたことが載っています。別段、この記事を疑う理由はありませんから、六〇〇年に中国との国交が百数十年ぶりに再開されるという大きな転機を迎えたとみてよいでしょう。

国交が結ばれると、両国間を使者が往還するようになります。当然、宮殿にも使者がやってきますが、そのときに、豪族の邸宅を転用した宮殿では、やはり問題があったのだと思います。推古は六〇三年に小墾田宮を造営して移り、隋の使いである裴世清などがそこを訪れています。小墾田宮の造営には、そうした外国の使節を迎えるのにふさわしい宮殿を新造する、という意味があったと想像されます。

その後、推古はずいぶん長生きをしますが、六二八年に死去し、舒明天皇が即位します。これ以降の飛鳥諸宮は、宮号に「飛鳥」を冠するように、狭義の飛鳥の地に建設されました。順番にいうと、飛鳥岡本宮（六三〇～六三六年）、飛鳥板蓋宮（六四三～六五五年）、後飛鳥岡本宮（六五六～六七二年）、飛鳥浄御原宮（六七二～六九四年）の四宮です。

これらの宮殿の位置については論争がありましたが、一九五九年以降継続している発掘調査で、大きく三時期（Ⅰ期〜Ⅲ期）に区分される遺構群を確認し、飛鳥寺南方の明日香村岡の一帯にほぼ重複して存在したことが判明しています。ここの発掘は、最初の年が奈良文化財研究所（当時は奈良国立文化財研究所）、翌年からは奈良県立橿原考古学研究所が現在にいたるまで行っています。宮殿ですので、それほど大量の土器が出土するわけではありませんが、出土した土器や木簡の年代から、Ⅰ期が飛鳥岡本宮、Ⅱ期が飛鳥板蓋宮（有名な大化改新のクーデターが行われた宮殿）、そして一番新しいⅢ期が後飛鳥岡本宮と飛鳥浄御原宮と考えられます。

こうした状況は、当時の宮殿がすでに天皇一代かぎりのものではなく、より長い年月にわたって維持されていたことを物語っています。実際、政務をとった天皇でいうと、飛鳥板蓋宮は皇極・斉明の二代、後飛鳥岡本宮は斉明・天智・天武の三代、飛鳥浄御原宮は天武・持統の二代の天皇が使用しています。ですから、七世紀中葉以降の大和の王宮は、火災によって一時的に移動した場合を除くと、実質上、この場所に固定していたといえます。

飛鳥の防衛施設と百済王宮の影響

七世紀後半になると、飛鳥諸宮の周りにいろいろな施設が造営されるようになります。『日本書紀』の六五六年の記事には、斉明天皇が田身嶺（多武峰）の頂上に垣をめぐらせ、嶺の上に両槻宮を営んだことや、「狂心渠」と呼ばれる渠を掘らせたこと、さらに、二〇〇隻の舟に石を積んで「宮の東の山」に運び、垣をつくったことがみえます。

こうした記事を裏づけるように、一九九二年には、飛鳥宮の東側にある酒船石遺跡の丘陵で、壁面に砂岩切石（天理の石上豊田付近から切り出したことが判明しています）を積み重ねた版築土塁が確認されています。その後も、丘陵の東側（飛鳥池東方遺跡）で、川を改修した大規模な流路が見つかりました。これが狂心渠にあたることはほぼ確実です。また、明日香村教育委員会や奈文研の発掘調査でも、その下流部分にあたる流路が数か所で見つかっています。

なお、「宮の東の山」に垣をめぐらしたことを、多武峰までつづく大規模な山城の造営と理解される方もいます。たとえば、橿原考古学研究所におられた河上邦彦さんはその立場ですが、『日本書紀』の記事からいうと、それは無理だと思います。多武峰の稜線上にあったと記される両槻宮を、「宮の東の山」にあたる酒船石遺跡の丘陵に想定することはできないからです。この記事を本格的な山城造営とみるのは難しいと考える人は、私だけでなく、数多くおられます。

さて、古代史上、六六三年という年は大きな転換点になります。日本は朝鮮半島の白村江で唐と新羅の連合軍と戦って大敗を喫し、唐や新羅による侵攻の脅威にさらされます。そのため、九州北部から瀬戸内を経て畿内にいたる長大な防衛ラインを強化し、瀬戸内海沿岸や九州北部に多くの朝鮮式山城を構築しました。六六七年三月には、都も近江（いまの滋賀県）の大津宮に移しています。

そういった防衛強化の一環として、近江遷都以前の大和でも、王権の中枢である飛鳥の防衛が図られたことは容易に想像できます。当時の朝廷にとって守るべき対象とは、第一に天皇の宮殿である後飛鳥岡本宮であったはずであり、実際、その東方の丘陵では、断片的ではありますが、尾根筋に設けた掘立柱塀が確認されています。